医事万華鏡

30．お盆に寄せて

今年もお盆の季節がやってきました。ところでお盆とは、日本古来の祖霊信仰と仏教が融合した行事で、仏教用語の「盂蘭盆会」を省略したものです。ちなみに、盂蘭盆会とは父母や祖霊を供養したり、亡き人を偲び仏法に遇う縁とする行事を指します。

またお盆とは、本来は霊に対する供物を置く容器でしたが、次第に祀られる対象の精霊の呼称となったり、盂蘭盆と混同されて習合したともいう説もあるようです。さらに盆踊りも、盆の時期に死者を供養するための行事だそうで、その起源は、空也上人が始めた踊念仏が、民間習俗と習合して念仏踊りとなって、盂蘭盆会の行事と結びつき変遷しながら今の形へと定着していったようです。

そのお盆の起源は定かではないようですが、1年に2度、初春と初秋の満月の日に祖先の霊が子孫のもとを訪れて交流する行事が、初春のものが祖霊の年神として神格を強調されて正月の祭となり、初秋のものが盂蘭盆と習合して仏教の行事として行なわれるようになったとも言われています。既にわが国では8世紀頃には、夏に祖先供養を行う風習が確立されたと考えられています。

一方で、お盆は正月と一体のものとも考えられ、共に「訪れるもの」（来訪神）を迎える儀礼として、「年神サン」と「御精霊（しょうらい）サン」、あるいは「先祖サン」と呼ぶならわしもあるようです。仏教的表皮がむしろ盆行事の本意を覆い隠しているとする説もあります。とすると、お盆とは、民俗学者であり国文学者であった折口信夫が言うところの「マレビト」（他界から来訪する霊的もしくは神の本質的存在）との出逢いの〝場〟でもあると言えそうです。

さて、われわれ現代人は〝生〟を当たり前のものとしてそればかりに目を向けてしまう一方、死からは目をそむけたり、日常の外縁に覆い隠してしまいがちです。しかし、コロナ禍という前代未聞の感染症パンデミックを経て、誰もが死からは逃れられず、いつ死ぬか分からない、ということを人類はその渦中で学んでいます。いわば、〝死の普遍性〟を思い知らされているとも言えるでしょう。

とはいえ、8月15日前後のお盆の時期、彼岸から訪れ再び彼岸へと立ち去っていく「来訪神」は、死の普遍性を知らせてくれるだけでなく、生きている我々に死生観を新たにするための気づきを与えてくれる〝師〟のような存在でもあります。であれば、コロナ禍によって死の匂いに怯えがちな我々であっても、お盆の季節、来訪神たる先祖との対話によって、死と生の両面に素直に向き合うことができるのではないでしょうか。

（ＪＭＳ主幹・野村元久）